

---

# 魂古今＜僕の魂は何処へ...＞

六星かのり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂古今く僕の魂は何処へ…>

### 【Nコード】

N9033E

### 【作者名】

六星かのり

### 【あらすじ】

「死んだら魂は何処へ行くのか？」それは、些細な疑問から全てが始まった。高校三年の同級生、田所・一ノ瀬・本庄の三人が不可解な出来事に巻き込まれていく、プチサスペンス調ファンタジー（？）の始まりです。三人は答えを見つけ出せるのか…。……あなたの魂は、昔は誰のものですか…？

## 【1】（前書き）

コメントや評価のほうよろしく願いますw  
今後の励みになりますので^^w

## 【1】

「ねえ、人間が死んだら、魂って何処に行くのかなあ？」

「は？オマエ何訳の分からない事言ってるんだ？」

「だって、気にならない？今感じている思いとか、感情って、死んだら何処に行っちゃうんだろう…。」

「おお〜いみんなあ〜。ヒロシがまた変な事言い出したぞあ〜。」

「ちよつ！一馬あ！ちゃんと話を聞くて約束だったろあ！」

こんな風に、それは些細な疑問から全ては始まった。

死んだら、魂は何処へ行くのか…。

俺は、別にこういう事を考える事が変だとは思わない。

空想とか妄想とか、何かを考えるとという事が好きだからだ。

だけど、クラスの皆、特に目の前に居る一ノ瀬一馬くいちのせかずま>は、いつも俺の話を小馬鹿にした様な態度で聞きやがる。

彼とは小学校からの幼馴染で、高校三年の今では、もう8年の付き合いだった。

何の因果か分からないが、彼とはずっと同じクラスなのだ。

俺が思いついた疑問や、空想論とか色々な話を聞いてくれる唯一の存在。

一馬はどう思っているか分からないが、俺にとっては大事な親友だった。

だから彼には、どれだけかわれようと、許すことができるのだ。

「ほほあ〜。また田所ハカセの妄想劇場が始まったのかい？」

そう言いながら顔をニヤつかせ、同じクラスの本庄卓くほんじょうすぐる>がやってきた。

はつきり言って、俺は本庄が大嫌いだ。

一馬のからかいに便乗して、面白がって更に輪をかけて俺を馬鹿

にする。

なにが田処ハカセだ。

俺の名前は田所博士くたどろひろしゝなのに、本庄は田処ハカセと呼ぶ。

本庄にそう呼ばれる度、俺は悔しくてたまらなくなる。

だけど俺には、口に出して言い返すことができない。

本庄は生徒会会長で、成績は常に学年トップ。

そんな輩を相手に口論しても、勝てる筈は無い。

俺は負け戦が嫌いなだけ。

小さい男だと思われても、弱虫だっと思われても構わない。

勝てないと分かっている立ち向かうのは、勇気なんかじゃない。

自分の力量をわきまえない、愚かな行為だと俺は思うんだ。

「おい、本庄。ヒロシのことをハカセって呼ぶのやめろよな。今度言ったらシツペだぞ。」

と、一馬は笑いながら言う。

「おおゝごめんごめん。じゃあ今度からはキョウジユにするわ。」

本庄は悪びれた様子も見せずに、ニヤニヤしながらそう返した。

これがいつものパターンだ。

昼飯を食べ終わり、俺が雑誌を読んでいると一馬が来て、

「なあ、今日こそからかったりしないから、面白い話聞かせてくれよ」

「この前も同じこと言って、結局皆に言いふらしたじゃないか。」

「あの時はあの時、今は今ってな。これは男の約束だ。たのむ、俺を楽しませてくれ。」

そう言う時の一馬の目が、俺は好きだった。

まるで、子供が親に絵本を読んでもお願いするような無邪気な目。いつもその目に騙されて、俺は自分の考えている話をしてしまうんだ。

そして、結局は皆に報告して、話を聞きつけた本庄がやって来る。

毎日、同じことの繰り返し。

俺に学習能力が無いわけじゃない。

一馬が俺の所へ来る度に、「今日こそは言わないぞ！」と心に誓う。

だけど一馬のあの目を見てしまうと、ついつい話してしまうんだ。「それで、今日の議題は何？」

本庄は聞いた。

だけど俺は、絶対に口を開かない。

コイツとは真面目に話したって、結局、最後には話の腰を折られてしまうのが目に見えているからだ。

「頭が良い」と、「頭が柔らかい」というのでは大きく違う。

本庄は頭が良い。それは大いに認めよう。

だけど、決して頭が柔らかいとは思えない。

彼は自分の意見が全て正しいと思い込み、それを他人に押し付ける。

周りの意見を受け入れられないのは、頭が固い証拠だ。

「常識」とか「普通」とか言う曖昧なものに捕らわれて、そこから少しでも外れたモノを全て卑下する。

人には、それぞれに考え方があって当たり前。

例えばそれが「常識」や「普通」から脱線していても、肯定はしないまでも「そういう考えもあるのか」と受け入れるのが、頭の柔らかい人間だと俺は思っている。

俺の考えが、正しいかどうかなんて分からない。だけど、この考えを否定する権利なんて、誰も持つてはいないんだ。

「今日は、死んだら魂は何処へ行くのお？だつてさ。」

一馬が、似ても居ない俺の真似を交えて言った。

さすがに少し腹が立ったが、とりあえずは無視をする。

「へえ」。死んだら魂は何処へ行くか。なるほどなあ……。」

本庄は、俺が読んでいた雑誌の表紙を見つめ、深く考えこんだ。

それは、いつものパターンではなかった。

いつもの調子で行くと、

「何だよそれ。そんなもんは消えてなくなるに決まってるだろう。」  
と、決め付けで即答しそうなもんだが、今は深く悩んでいるのだ。  
少し不気味な光景だった。

やがて、昼休みの終わりを告げる呼び鈴が鳴った。

それでも本庄は深く考え込んだままだった。

明らかに、いつもの彼とは様子が違う。

そして、何かひらめいたかのように、急に俺の顔を見て、

「あのさ、今日の放課後、時間あるか？」

「え？俺？」

「そうだよ。お前しか居ないだろう。」

「放課後なら、毎日時間あるけど？」

「そうか。…じゃあ今日の放課後、家に来ないか？」

「本庄の家に？何で？」

「何でも何も、その課題について、もう少し話したいんだ。もし  
一人が嫌なら一ノ瀬も一緒にいいぞ。」

そう言つて、本庄は一馬の方を見た。

急に話を振られ、驚きの表情で一馬は答えた。

「俺もかい！……まあ、いいや。どうせ俺も暇だから付き合っわ。」

「じゃあ決まりな！田所もオツケーだろ？」

「う…うん。」

俺は答えに躊躇った。

別に、本庄の家に行くのが、嫌だったからではない。

本庄が、俺の事を普通に苗字で呼んだ事に、違和感を感じたからだ。  
だ。

何か嫌な予感がする。

いつもと違う事が起こる時は、大抵が悪い事が起こる前触れなのだ。  
だ。

この前も、俺の母親が柄にも無く、ばつちりと化粧を決め込んで

出掛けたと思ったら、交通事故に遭い全治一ヶ月の大怪我をした。

その前は俺が中学2年の春、生まれて始めて異性に告白され上機嫌で家に帰ると、愛犬のロンが死んでいたのだ。

他にも、上げたらキリが無い。

俺が嫌な思い出にふけていると、やがて五時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「じゃっ、そういうことでヨロシクな。」

そう言って、本庄はさっさと行ってしまった。

「なんか：おかしい事になったけど、まあいつか。アイツの家、金持ちらしいし、美味しいモンに在りつけるかも。じゃあな。」

そついい残し、一馬も自分の席へと戻っていく。

やがて国語の担当、大原先生が教室に入ってきて、いつものように授業が始まった。

だけど、授業の内容など全く頭に入ってこない。

初めて本庄の家に行く緊張と、いつもと違う事が起きた不安が俺の心を掻き乱す。

頭の中は放課後の事でいっぱいになった。

そして、嫌な予感を覚えつつ、放課後はやって来たのだ。

【続く】



## 【2】（前書き）

評価やコメントよろしく願いますw

## 【2】

放課後…。

俺たちは、約束通り本庄の家に来た。

本庄家が金持ちだという噂は、校内では有名な話。生徒だけではなく、教師連中までもが、彼に一目置いているのだ。

彼の親の仕事等に興味は無かったから、聞いた事も無い。

俺の勝手な想像では、一般家庭に少し毛が生えたぐらいの生活水準で、そこまで騒ぎ立てる程でもないだろうと思っていた。

だけど…、

「本庄つて…本当に金持ちなんだな…。」

一馬が、家を見上げながら呟いた。

目の前にそびえる本庄家は、俺の予想を遥かに超えた、とても大きな一軒家だったのだ。

磨き上げられた石造りの門。その奥には、手入れの行き届いた庭園が見える。玄関上には大きなバルコニーが一つ。それを支える柱は、いかにもギリシャ神話等に出てきそうな印象を受けた。

見ているだけで眩暈を起こしてしまいそうな程、金持ちオーラに満ちた造りだ。

本庄家の荘厳な佇まいに、飲み込まれてしまった俺と一馬。そこへ、

「おい、そんな所で油売ってないで、早く入れよ。」

「あ…ああ。」

俺は声を出すのもやっとの状態で、なんとか返事をする。

見ると、本庄は玄関の扉を半分開け、俺たちを待っている様子だった。

慌てて玄関へと向かい、家の中へとお邪魔した。

「玄関広れえ〜〜〜。」

「すげ〜。」

それが、家に入って直ぐの、一馬と俺の第一声。

何人分の靴が置けるのか解らない程広い玄関に、何十足の靴が入るのか予想もできない程大きな靴箱。その上には、何十本というカラフルな花々が、外国製と思われるいかにも高そうな花瓶に生けてあった。

その雰囲気には圧倒されている俺の横で、

「たぶん、俺の部屋よりでかいぞ。何置あるんだ？」

「いや…。和装の造りじゃないから、何置って聞かれても…。」

一馬の低俗な質問に、本庄は苦笑いを浮かべ、本当に困ったという様な顔をした。

「まあ…とりあえず、上がれよ。」

そう薦められ、俺と一馬は靴を脱ごうとしたその時、

「あら。卓君、お友達連れてきたの？珍しいわねえ。」

と、品の良い女性の声が聞こえた。

視線をそちらへ向けると、年齢不詳の綺麗な女性が、にこやかな笑顔を浮かべこちらを見ている。本庄のお姉さんなのかと思っただけ、珍しいとか言うなよ。とりあえず、俺の部屋で調べ物するから、飲み物と食べ物を適当に持ってきて。」

「じゃあ、お母さんが腕によりをかけて、美味しいピッツアでも作って持って行くわね。」

「解つてると思うけど、バジルは…」

「乗せちゃダメね。それくらい解っているわよ。」

二人の会話を聞きつつ、俺は大きな疑問を抱いていた。

確かに、目の前の女性は年齢不詳なのは間違いない。だけど、どう見ても30歳を超えている様には見えないのだ。

女性が母親だとして、歳の計算が全く合わない。

何か、複雑な事情があるのか？と、得意の妄想に浸ろうとしたが、

「おい、早く部屋に行こうぜ。こっちだ。」

そう言って本庄は、そそくさと廊下の奥へと進んでいつてしまった。

俺は思考を現実に取り替え、靴を脱いで後を追う。

廊下の一番奥にあった階段を上り、二階廊下を進む。

左右に3つ、突き当たりには1つ扉があった。

一体何人家族なんだろう？と思ったが、あえて聞く事はしない。

低俗な一馬と、同類だと思われなくなかったからだ。

やがて本庄は、突き当りの扉の前で立ち止まり、

「ここが俺の部屋だ。入って。」

そう言って部屋の扉を開け、左手で、早く入れと促した。

早速部屋に入ると、

「うおお！テレビでかつ！あ…すげー、プレステ3も360もWi  
iまで揃ってる。」

「すげーソフトもいっぱいある…。」

それが、一馬と俺の部屋に入っただけの第一声。

驚きつつも、やはり俺と一馬は低俗な一般庶民なんだと改めて  
思った。

「なあ、今度プレステ3のソフト貸してくれよ。来月の誕生日に、  
なんとか本体だけは手に入りそうだから。一生のお願いだ！頼む！」

そう言いつつ、両手を合わせて懇願する一馬に対し、本庄は再び  
苦笑いを浮かべつつ、

「ああ…わかったよ…。」

「よっしゃ！！さすが、持つべきものは友ってヤツだな。」

一人で盛り上がる一馬を無視して、本庄はさっさと机の椅子に腰  
を下ろす。

机の上は綺麗に整頓されていて、最近のテレビCMで見たような  
モデルの、デスクトップ型のパソコンだけが置いてあった。

早速本庄はパソコンの電源を入れ、

「田所、ちょっとこっち来てくれ。見せたいものがあるんだ。」

「見せたいもの？それが、今日の話と何か関係あるの？？」

「ああ…大ありだよ。正直、あの話題が出た時は驚いた。いつもの田所八カセの下らない話とは違って、今日の議題はビンゴだった。」

「下らないって…。」

「あ…すまん、気を悪くしないでくれ。俺が勝手に、下らないと思ってるだけだから。」

そう言われ、少しだけ腹が立った。

だけど、今回の話が認められた嬉しさが、沸き立つ怒りを沈めてくれる。

「実はな、俺も中学の時に同じ疑問を抱いていたんだ。それを最近思い出して、ネットで色々調べた結果、不思議なサイトに辿りついたんだよ。」

「不思議なサイト？」

「ちよつと待つてな。お気に入りに入れておいたから、直ぐ出る。」

俺と本庄が画面を見つめる中、ネット用の画面が立ち上がり、どこかのポータルサイトが映し出された。

後ろで、一馬がソフトをあさるガチャガチャした音が少し気になったが、それは本庄も同じだったようで、

「なあ一ノ瀬。全部まとめて貸してやるから、とりあえずこっち来て一緒に見ようぜ。」

「マジ！？さすが金持ちは太っ腹だねえ。」

そう言いながら、一馬はソフトを出しっぱなしのまま、俺の横に来了。

俺一人で来れば良かったなと思うが、それはもう後の祭りだ。

「おし、来た来た。見てみコレ。」

「ん？タマシイコキン…なんだこれ？？」

「一ノ瀬…違うだろ。漢字の上に読み仮名書いてるって…。」

一面真っ黒の壁紙の上に、このサイトの名前なのだろう、「魂古今」と大きく書かれていた。その上には本庄の言つとおり、小さく「こんこん」とルビが振ってある。

「こんこんって…変な名前だな。センスが無いよセンスが…。」  
一馬がそう騒ぎ立てる隣で、俺は画面を食い入るように見つめていた。

サイト名の下には、変な模様に囲まれ「説明」と書いてある。

その下は丁度画面から見切れていたので、

「ねえ、この下には何て書いてあるの？見せて。」

「オーケー。」

そう言って本庄はマウスのホイールを動かし、画面をスクロールしてくれた。

やがて、「説明」の全文が現れ、そこには、こう書いてあった。

当サイトは自分の【魂】について知りたいと願う【愚かな罪人】  
たちの為のサイトです。

それ以外の目的での入場の際に発生した事故やトラブル等は、一切の責任を負いかねます事をご了承下さい。

尚、ご入場の際には、死をも恐れぬ十分な心構えをお持ちのうえ、下部のENTERボタンをクリックしてください。

「なんか…書いてある事、めっちゃ怖いんだけど。」

「田所もそう思うだろ。俺も思ったさ。事故だとか死とか書かれると、ちよっと引くよな。だから、俺もまだ中に入ってないんだよ。」

「そりゃそうだろうね。」

俺と本庄がそう会話している横で、一馬が、

「何言っただよ、二人共。こんなの、他人を怖がらせて喜んでるだけだつて。ちよっと貸してみ。こんなもんはさ…」

そっぴいつつ、一馬は勝手にマウスを握る。そしてそのまま、

「ここを…」

「おい！一ノ瀬やめろよ！」

「ポチッと。」

本庄の制止も聞かずに、一馬はENTERをクリックしてしまった。

【続く】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9033e/>

---

魂古今＜僕の魂は何処へ...＞

2010年10月28日07時54分発行